

子育てシンポジウム記念講演

大人が育つ保育園

山本 健慈

(アトム共同保育所所長 /
和歌山大学生涯学習教育研究センター)

2001年7月15日 東京都板橋区産文ホール



こんにちは。

昨日は滋賀県のある山村の町で講演を行ないました。幼稚園関係者や保護者にもたくさん呼びかけますからと言われ、そういう人たちもたくさん来てくれるのならいいなと思っていましたら、300人ぐらいの人が来ていたのですが、年齢が私より上の人たちばかりでした。そこで準備していたことはまったく意味がなくなってしまうので、孫育てとかこれまでの世代の人が経験したことを活かしてどういうふうに支援をするかという話に切り替えなければいけませんでした。

今日はどんなもんだらうと思っていたのですが、ずいぶん若い人が多いですね。でもただけだいたい幅がありますね。今就学前の子ど

もを育てているという方がいましたら手を上げてください。かなりいますね、お父さんもいますね。私は52才なんですが、私より年上だという方はいらっしゃいますか？2人おられますね。時間も限られていますのでぼんぼんとお話をしていこうと思いますが、足りない分はアトム共同保育所刊行の「おたがいさま...家出のできるまちづくり」という本と横川和夫さんのルポルタージュ「不思議なアトムの子育て...アトム保育所は大人が育つ」という本がありますので、ぜひ買ってください。私はアトム共同保育所所長ということになっています。共同保育所というのは保母さんに賃金がまともに払えないところなので、私ができることは本を売った収益を保母さんのボーナスにすることです。私にとっては本が何冊売れるかということが重要なことですので、ぜひよろしく願いいたします。

「子育て支援」

今日は「大人が育つ保育園」という題目で、「地域子育ての現状とそれを克服する課題」というテーマをいただいています。

去年の3月にこの会場で講演を行ないました。あの日は雨が降っていたのですが、会場を出ようとしたら若い女性の方に深く「ありがとうございました」と言われたのです。駅へと2人で歩きながら、「どうしてですか?」と聞くと、「今日私は先生の話で救われました。」といいます。その理由を聞くと、「私は近く出産するんです。」と。確かあの時は年配の方が多くて、出産をされるような方は少なかったと思います。「実は私はシングルマザーで子どもを産むつもりです。まわりの人は反対したり、いろいろな意見があったりしたのだけれど、それでも生むつもりで準備してきました。だけど子供に辛い思いをさせるのではないかと、迷いながら今日まできました。」と彼女は言いました。

私はそのときの講演で、子どもにはもっと辛い思いをさせる必要があるという話をしました。辛い思いをさせないでおこうさせないでおこう、という今の子育てのなかの問題があるという話をしたのです。それを聞いて彼女は、「少々子どもには辛い思いをさせてもいいのだ、それを乗り切ることによって生きる力もついていくのだ」というふうに思えるようになった、そう思ってもいいのだと思えるようになったというのです。

つまり「子育て支援」といってもそれは本当に個別なもので、同じように何かをやっただけだったり、することが求められているのではないのです。

泣きたい子

今日は10時前に羽田に着いたのですが、そうしたら私の携帯に「もう着きました

か?」とメールが入りました。それは渋谷に住んでいる、皆さんに名前を言ったらすぐわかる今売出し中の歌手のプロデューサーと結婚している女の子からでした。彼女も作詞などしたいです。彼女はアトム共同保育所の元保母さんの娘さんなのです。彼女には12月に生まれた7ヶ月の子どもがいますが、夫は売れっ子のプロデューサーで家にいることがあまりないので、子育てで孤立して参ってしまい、つい先日まで熊取町に帰って来ていました。

午前中はその彼女のところによってからこちらへ来ました。彼女がなぜ参ってしまったのかというと、彼女の赤ちゃんとにかくもうすごい子なんです。その子は、こんなに泣いた子は見たことがないというくらい泣ける子なんです。鳴いたら泣き止まないのが平気で、それだけエネルギーがありあまっているのでしょうか。ところが彼女は、子どもを泣かすのは母親失格であるという観念があって、うるさいというのもあるけれども、泣かすのは自分が悪いと思っているのです。だから泣かしちゃいけない、泣かしちゃいけないと、いつも奮闘しているわけです。子どもは泣きたいんです。その子は泣きたい子なんです。子どもはいろいろあって、泣きたい子どももいるしあんまり泣きたくない子もいるのです。だからどんなにうるさくてもすぐ寝る子もいれば、ちょっとの音にも敏感でワンワン泣く子もいます。こうした子どもの違いがあるのに泣かせないようにと奮闘すると、中途半端にしか泣かしてくれないものですから子どもは四六時中泣いているわけです。そんな状況で、参ってしまって大阪に帰ってきました。

アトム共同保育所はいつも、だれにでも開放していますから、親子連れがきています。

彼女のさっそくきました。アトム of 所長代理（実質の所長ですが）に市原悟子（いちはらよしこ）というひとがいます。彼女はその子どもを一目見るなり「この子は泣きたい子である。泣かしてやる必要があるんだ。ほっといて泣かしてやんなさい。」と言ったのです。そうしてアトムにきた初日に、適当にあやしながら、「満足するまで」1時間近く泣かしてやりました。そうしたらびっくりしたことに、その日は家に帰ってぐっすり寝たというのです。しかし、それは、なかなか親では、それも第1子ではなかなかできないわけです。市原悟子さんのようにベテランで、今までたくさん子どもを見ている人だから、泣かせてやれと、泣いていても面白いと思えるのです。普通の親はそうは思えないのですね、やっぱり。泣いたらかわいそうだ。

そのときに私の子育て時代のエピソードが役に立ったそうです。私の娘、今高2ですが、生まれた直後、母乳は出ない、ミルクは飲まない、四六時中泣いていて大変でした。あるとき正月で人のかかわりがあまりないときに私も参ってしまって、夜中に娘をごみ箱に捨ててやった（「置いた」）ことがあります。まあ、パフォーマンスです。それで私も気が治まりました。そのエピソードを市原さんが覚えていまして、「いやあ、山本さんもいまでは子育てはこうだと、かしこそうな話をしてるけどね、実は娘さんが赤ちゃんのときにごみ箱に捨てたようよ。」と、東京から帰ってきた彼女にいったというのです。そしたらすっかりそれでお母さんは安心して、親というのは子どもが泣くことばかり気にしなくていい、腹が立ったらごみ箱にでも捨ててもいいと思えてちょっとは気が楽になったそうです。

しかし、なかなかそんな乱暴な子育て支援

をする人は少ないですね。渋谷の彼女は初めての子育てということもありまして、面白い情報をいろいろと持ってきてくれます。彼女は東京で派遣助産婦さんが訪問をしてきたとき、その記録をビデオに延々と撮っていて、私たちはそれを見せてもらいながら、助産婦さんが何を一言一句言ったのかということを含んで研究することができました。助産婦さんは「こんなサービスは初めてよ。」と言って4時間近くいたわけですが、それはそのはずで、彼女が聞いたような顔をしているからで、熱心に聞いてくれていると思うから一生懸命しゃべったのではないかと思えます。日光浴の仕方なんていうのを教えておられるのですが、微にいり際に入りで、最初の日には足を表にして沐浴して、翌日になったら今度は裏にしてとほんとに細かく教えているのです。僕なんか見ていてだんだん腹が立ってきて、その助産婦さんは72歳と言っていましたけど、ほんとに自分がやったことを言うてんかと思ってしまう。しかし聞くほうの彼女からしてみたら、日光浴はこういう風にしないではいけないと思って一生懸命聞いているわけです。それを聞いて、今日はどっち向きだの明日はどうだのとまじめにやっているうちに自分がパンクしてしまって、実家に帰ってきたということです。

子育て支援 = 親の人生の支援

最初にも話したように、つまり子育て支援というのはものすごく個別的なのです。そして私は、結局は「子育て支援とは親の人生を支援することだ」と思います。子育ての生活だけを支援するのではなくて、親の人生を支援しないと子育て支援にはならないのです。ある意味で子育てというのは、自分の人生の



様々な能力の凝縮した部分みたいなものなのです。だから不器用な人はなかなかできないのです。器用で能天気な人は、少々トラブルが起こっても乗り越えられます。ですから、何か子どもの育て方とか扱い方を教えてあげれば子育て支援になるというのではなくて、その人の人生、これまでどんな歩みをしてきてどんなことでつまづいていて、そして今どんなふうなのかということがわからなかったら危なくてアドバイスなどできません。つまり日光浴の仕方を、微に入り細に入り教えたばかりに、ノイローゼになってしまう人がいるのです。助産婦さんや専門家は彼女の生活を24時間見ているわけではないから、そんなことが言えるのです。

アトム共同保育所にもそんな、専門職の対応で傷ついたとか、どうしようもなくなって駆け込んできた人がいっぱいいます。インターネットでの青酸カリ自殺がありました。が、「先を越されちゃったから私は心中ができなかった。」という人が来たこともあります。なんでなのかというと、子どもがすごくアトピー性がひどいのです。読売新聞(大阪本社版)のちに「ひとりじゃ子育てできない」かもがわ出版)に出たアトムのエッセイの切り抜きを手に子どもが2歳のときに駆け込んでこられました。その人は、ここなら

ば私を救ってくれるかもしれないと思って来た人なのです。子どもがアトピー性皮膚炎にかかっているからお医者さんにかかっている。お医者さんから助言されたことは、どんな食事をつくるのか、掃除はきちんとしていつもきれいにしていなくてはいけない、ふとんもちゃんと干さなくてはいけないということでした。しかしだんなは海外に単身赴任中。そんな中でかゆがって泣いている子どもを横にして、食事づくり、洗濯、掃除、ふとん干しと、きちんと2年間もやっていたらそりゃあ死にたくなるのはあたりまえですよ。子どもがむずがってとにかく寝ないので、彼女は2年間ふとんで寝たことがない、いつも背中におぶってソファにうつぶせになって寝ていたと言うのです。そんな生活状況を理解せずにお医者さんは助言をするわけです。お母さんは、その助言通りにやるのが大切だと思い込み、私にはそれができませんとは言えないのです。だから、まじめにやろうとします。そして追いつめられていったのです。彼女の家からアトムまで、かなり距離があります。近所に保育所や幼稚園がないわけではないのです。自宅の前にも幼稚園・保育所があるそうです。どうしてそこに駆け込まなかったのかとのです聞くと、「そこに私が助けてといて駆け込んだら、親として失格だと叱られそうな気がする。」と、日々子どもや親に接する先生達の風景を見て思ったと言うのです。「だけど新聞の記事を見て、見たことも聞いたこともないけれど、アトム保育所だったら私を受け入れてくれると思った。」と駆け込んでこられたのです。お医者さんなどの専門家は、子育て支援に対する善意や技術があるのですが、子育てというのは24時間365日の生活の一部であるという認識が非常に弱いのです。そ

して自分の専門的な知識を切り売りしたら、それでもう支援できたような錯覚に陥ってしまう。それは受ける立場からすると、異議申し立てができないような関係の中で行なわれています。ここを徹底的に克服していかなければいけないと思うのです。つまり、親の生活や人生を支援するという考え方が非常に大切であるということです。

動物としての荒々しい体験

私の専門は子どものことなどとは関係がありませんでした。社会教育、生涯学習といった大人の学習論をやってきたので、大人には関心があったけれどもアトム保育所に出会うまでは、「いいいなになに保育園があるというけど、人生の5年間いい保育をやっただけでそんなたいした人間できるわけじゃないの」と思っていましたし、今でもそう思っている部分があります。親の人生を支援することが大事だということは、これまでの保育のあり方としてはあまり考えてこられなかったと思います。

そうしたことを含めて、アトム共同保育所はずいぶんおもいしろいと思われたのでしょう。そのなかで今日は、子育てをしている方やお仕事としている方がいらっしゃるので、今子どもにどんなこと要であるのかということをもまず申し上げたいと思います。

就学前の子どもにとって今一番必要なことは、「人を傷つけたり、人に傷つけられたりするような経験である」と考えています。子どもというのは人と人との関係でトラブルを起こすと、話をして人を説得するという技術を持ち合わせていませんから、とにかく蹴飛ばしたり、突き飛ばしたり、ひっかいたりします。そういうお互いに突き飛ばしたり突き

飛ばされたりといった、そういう時間がたっぷり必要なのです。つまり、動物としての人間の体験というか、荒々しい欲望の固まりのような人間の体験、あるいはそのことで自分を表現するというような時間をつくりだすことが一番重要なのだと思っています。これはある意味で、これまでの私の保育内容批判にもなります。「いったい良い保育内容といわれる保育所生活でいい子どもが育ったのか?」。その「いい保育所生活」には、動物的な体験を5年間させるということにどれだけ注意を払ってきたのかということがあります。

かつて家庭生活は例えば非常に荒々しくて、兄弟がいて上の子は下の子を適当にあしらったり乱暴したり、親もそんなに丁寧に面倒を見たりせず乱暴なことがあったり、そして地域に出れば同世代の子といざこざはあるは、いじめられたりするはで、そしてそんな生活があったなかで保育園も幼稚園もありました。要するに「家族」「地域」生活と「幼稚園・保育所」生活が役割分担ができる条件にあったのです。ところが今は、その動物としての荒々しい、乱暴な世界というのは全くゼロになってしまった。むしろマイナスなことに親は丁寧に子どもの面度を見る。また地域ではまったく、人と人の接触がない。このようにマイナスやゼロになった状態の中で、は1子どもを保育所や幼稚園に預けるのです。は1同じ動物という人間に濃密に接触する場として、保育所や幼稚園が登場することになります。

子どもたちは「保育所・幼稚園」では1群れをなすわけですから、衝突してあたりまえなのです。関西方面では公立幼稚園というのは2年が多いのですけれども、入園直後は、とてもたいへんです。4歳で幼稚園に入って

くるのですが、4年間「不幸なことに」（と私は強調したいのです）親のみ下で育てられていますから、入園後は1群れをなすのです。それはもう1匹1匹がボス山のボス、あるいはお姫様か王子様だったものですから、よっぽどだましが上手な先生でなければまとまりようがないわけです。あちでぶつかりこちでけんかしたり、もぐらたたきみたいなものです。

それはしかしあたりまえの話ですよ。日本は本当に貧しい国で、4歳児30人、40人を1人の先生が見るという状況です。そんな、30人も1人で見られるはずがない。小泉さんも改革してくれるのならそういうところを改革してほしいものです。アトム保育所は月給は十分払えないのですが、子どもに対する労働力コストはものすごく濃密です。ひとりの保育士あたりの子どもの数は、4歳児5歳児の子ども15人に1人がついています。日本では4歳児5歳児の子ども30人、35人を面倒見るといっているようになっています。

親世代の問題

そして先ほども言いましたように、ストレスを抱えた母親の下で暮らした4年間からやっと解放されて保育所や幼稚園に来たら、群れの中の様子は目に見えているわけです。そこで、群れの中で傷つけあったりけんかしたりして良かったね、は1ここで動物としての体験が始まる、というふうに親たちが思ってくれば良いけど、そうは思ってくれません。そんなトラブルが起こったとしたら、子どもはまだ耐える力があって面白いことがあると思えば翌日も来てくれますが、親のほうのパニックになって、なんというけしからん幼稚園だ、先生は何してたんだ、どこの子が

あんなことをしたんだとか言って、親同士がもめるのです。先だってある近畿の幼稚園に行ったら、子どものトラブルが心配でずっと幼稚園の前で監視している親がいて、トラブルが起こって、それを先生の目に付いていなかったら門をあけて入ってきて、「この子がいつも私の子をいじめる！」と言って怒鳴り込んでたそうです。それが笑い話で終ればいいのですが、実はそのことが非常に深い因縁になることがあります。

文京区の音羽幼稚園の事件というのも、子どもの直接的な関係よりも、親と親との関係や問題を自分達では解決できないということを表していると思います。

さきほどの幼稚園の話で言うと、母親同士、保護者会の役員をめぐってもめていました。なぜかという、新年度の役員を決めるときに役員にと勧められたある人が、できませんと断ったのが原因です。そしたら別の1人の人がものすごい表情でエキセントリックになって、「卑怯者！なんであんたは引き受けないの！」と怒鳴り始めて収拾がつかなくなってしまいました。それから2人のことに触れるわけにもいかないし、しかしほっとくわけにもいかないしで困っていました。その幼稚園の先生たちは、その事例を深く検討していて、なぜそういうことになったのかということのをだいぶ長い時間をたどって議論したのです。そしたら発端は4年前にあったということです。実は4年前に、上の子同士が一緒でした。そのときに、あるAさんの子の箸が折れてしまいました。先生は見えていなかったの、どうして折れたのかわからなかったらしいのですが、Aさんの子どもは家へ帰ってから「B君が折った。」と言ったそうです。そこで朝の集合場所で、AさんはBさんの子どもに「お箸なんてね、たくさん

あるんだからいくら折ってもいいのよ。」というふうに言ったと。そうしてエピソードがあったそうです。ところが、AさんとBさんの間にはその後は何事もなかったようになっていたのです。そして4年後に下の子でまた一緒になったときに、保護者会での出来事が起こってしまったのではないかということです。心と心のぶつかり合いが4年間続いて、それが爆発したのです。つまりもうそれは子どもの問題ではありません。

今30代半ばの人達の問題がずいぶん話題になっていますが、30代半ばの人ぐらいから、トラブルを解決して気持ちよく乗り越えたという経験がないわけです。あるいは自分が育った時代にもう群れはなく、保育所や幼稚園では管理されて育った。小学校はどうだったかという、第1次のいじめ世代ではないかとおもいますが、学校の中でいじめたりいじめられたりという風景を見ていた世代です。人間と人間のぶつかり合いの関係において、気持ちいい、心地いい体験をしたことがなく、非常に危なっかしくておびえている世代です。そういう世代であるから、子どもは幼稚園に行っても群れの中でもみ合って成長するというそんな理屈はわかったとしても、そんなこと恐ろしくてやってられないのです。

トラブルに耐えられない世代が子育てをしているわけですから、その親の世代の人生のリハビリというものをやらなければ、子どもを育てるとか子育ての支援なんていうのには及ばないと考えています。つまり子育て支援は別の言葉で言うと、これまでの人生のリハビリに同伴することだと思います。

保母が育つ保育所



ここには保育士さんもいらっしやいますけれども、保育所の資格や幼稚園の資格があるからといって子育て支援ができるというのではないのです。あんまり「専門性」そんなことを考えないほうがいいのかもかもしれません。普通の人でもできるのです。

今日の午前中渋谷のマンションで、私がミュージシャンの彼女の話聞いてきたのですが、その内容は夫婦喧嘩のことでした。確かにそういうことを人に喋っていれば乗り切れるのですね。しかし今は喋る人がいない。こういうことにはあんまり専門性は必要ありません。アトム保育所は本などでご存知の方もいるとは思いますが、いろんな人がいます。保育士の資格を持っている人もいますが、あんまり勉強が得意ではなかったのでしょう、何回も試験に落ちてたまたまアトムに空きがあったので来た人、中卒でどこに行っても長続きしなかった人、人が足りなくて隣の人に声をかけられて来たパートのおばちゃんなど、ほんとうに素人集団です。彼女達は、保育所での職員会議で親のニーズを理解するためのいろんな議論をする中で、保育士の資格をとったり、栄養士の資格をとったりして、今はかなりの人が資格を持っています。

今日の事業の実行委員会では、小出まみさ

んの「地域から生まれる支え合いの子育て」を勉強したと聞いていますが、小出さんがカナダの事例からは子育て支援で重要なことは、「相手の味方になりたいと思う心である」と言っています。まったくそのとおりです。相手の味方になってやろう、なんかやってやろうと思えばなんでも考えられます。

先だって全国社会福祉協議会の保育士研修に呼ばれまして行きましたら、私の前にポピンズという民間保育所の経営者の中村さんという方が講義をしておりました。その資料を読みましたら保育の質が大切だということが書かれていまして、その質を保証するために自分のところの経営では、アメリカでマスターやドクターを取った人を採用しているのです。アトム保育所では、とうてい考えられない学歴です。ですが「切実に相手の味方になりたい」という思いの人が集まっています。アトムに集まっている中年の人や若い人は、自分の人生を順調に歩まずに傷ついたりした経験があるので、困難を抱えたり傷ついた人を見れば、支援する人がそばにいればいいなという志、気持ちが自然と働くのだと私は考えています。

もちろん支援するというのは大変なことで、支援する側は実にストレスがたまります。それは職員会議で、お互いの努力を評価したり、失敗したことを議論したりする中で、癒されたり成長したりしていっています。「アトム保育所は山本先生が指導していらっしゃるからうまくいっているんですね。」という人もいますが、私は保育所で職員に、きょうのような話をしたことなどは全然ありません。とにかく目の前の現実が教科書で、それを議論していたらいろいろな方法が出てきます。失敗や成功の経験から、1つの実践をつくりだすためにみんなが智恵を出し

て、人がやったことから自分が学ぶということ。人から学ぶことや自分が失敗したことによって、自分自身が成長しているという実感がある、たとえ失敗してもがんばっていると周りが評価してくれるという実感があるからできるのです。アトム保育所は、保母さんたちが育つという意味での大人が育つ保育所なのです。

誰かがいつでも助けてくれる

そうした志をもち、お互いを訓練した職員が、親達のリハビリにどう同伴しているのです。最近しばしばアトムに幼稚園や保育園の先生が研修に来られます。自分が担当していた子どもが虐待で死んでしまったという幼稚園の先生が、研修にこられたことがあります。その彼女は、児童相談所の通知で子どもが虐待をされているのを知っていたのでなんとか親を支援していかなくちゃと思って、親に一生懸命アプローチをしたということです。しかしアプローチすればするほど親に逃げられて、そして結局だんなが夜勤のときに、その子どもは殺されてしまいました。それで彼女はショックを受けて立ち直れないというときに、アトム共同保育所編の「大人が育つ保育園」(ひとなる書房)の本を読んで、アトムに行ったら自分は再起できるかもしれないと思ってアトムへ来たということです。そこで彼女が「とてもくやしい、なんで私は気がつかなかったのだろう。」とおっしゃったことがひとつあります。

アトム保育所では、保母さんがしょっちゅう家に子どもを連れて帰っているのです。疲れたような顔をしているお母さんがいるじゃないですか、そうしたら「疲れているみたいだから土日は私の家に連れて帰ってあげる

わ。」と言ってよく連れて帰っています。1人だと大変ですので同じクラスの子を2、3人誘って連れて帰ります。2、3人だと、風呂に入るのもみんなで勝手に入れるし、遊ばすのもよその家だったら緊張していてもその子もいれば問題なく遊べますのでいいのです。預かってもらうほうも、1人で預けるより気が楽です。みなさんもお存知の様に、最近では女性の労働も大変で、高いキャリアのスーパーウーマンはたくさんいます。ですから、土日なんて家事もやる気もなければ子どもと付き合うエネルギーもほとんどないという方がずいぶんいらっしゃいます。そういう人はだいたいインテリなんです。ところがアトムのお母さんはさっきお話ししたようなキャリアですので、インテリとは肌が合わない。だから日ごろあまり、しっくりしていない関係も見えます。相手のお母さんからは、学歴もなく、昔不良だったような人(と思える)若い保育士に子どもを見てもらうというのはどうかなあ、というような目線がちらちらとうかがえます。日ごろは火花が散っているのです。

が、でもやっぱりお母さんがしんどそうな顔をしていると保育さんたちは、「つれて帰ってあげようか。」と声をかけてしまうのです。先ほどの研修に来ていた幼稚園の先生

はそれを見ておられて、「言葉で救おうと思わずに、家にお父さんが夜勤でいないときはそれとなく子どもを連れて帰ってやればよかったのに。なんか支援をしてあげようと、声をかけて気持ちを聞いてあげようということばかりで。それを自分は気が付かなくてくやしい。」と思われたのです。

アトムでは子どもを家に連れていくということはしょっちゅうあるのですが、それはお泊りのはしごみたいなものですね。結局それは非常に重要なことで、私は「家出のできるまちづくり」と言っております。親子では必ずトラブルが起こりますから、そのトラブルが起こったときに支えてもらうことのできる大人を、小さいころはいっぱい知っておく必要があるわけです。あるいは親のほうも、トラブルが起こったときにあてにできる自分の友達をたっぷり持つておく必要があるのです。私はそれがアトム保育所を卒園するときの要件であると思っています。さっきも言ったように、5年間立派な保育をやったなんていうのは薄っぺらいもので、その後人生を同伴する親子が危機に陥ったときに、その危機を救ってもらえるような人間関係が地域にあるということが重要なのです。「家出のできるまち」、トラブルが起こったら大人も子どもも駆け込んでいけるような当てのあるまちが必要だと思っています。

それをつくっていく拠点の役割が保育所にはあるのです。それが個別的支援からはじまる子育て支援の最終的なテーマです。

実際あるお母さんは、ドメスティックバイオレンスでひどい怪我をして入院しなくてはいけなくなりました。もちろんだんなは子どもの面倒なんか見ません。1ヶ月間お母さんが入院する間、アトムの若い保育士たち3、4人がローテーションを組んで子どもを預かっ



ていたことがあります。それまではそのお母さんは、他の保護者にSOSを出すわけでも相談をするわけでもなく、親同士の関係にもあまりとけ込まないでひっそりとしておられました。その後そのお母さんは離婚をされて子育てをやっておられるのですが、アトムに来ている子どもを預かってくれるようになったのです。今アトム保育所は「おたがいさま」という冊子にもありますように出産ラッシュで、2子、3子と生むお母さんが増えていきます。「なんで生むねん」と座談会をやったら、「いや、ここにいたら誰かがいつでも助けてくれるし、そういう気になったらもう1人いてもいいかなと思って。」というのが共通の見解でした。あまり深刻なシステムではないのですが、誰かがいつでも助けてくれるということが実感できれば生めるのです。

そんな出産ラッシュの中で、上の子どもはお母さんの入院している間どうしていたのかというと、かってだんなから暴力を受けて入院していたお母さんが、出産入院中の親の子どもを自分のうちに連れて帰って面倒見ていたのです。そのお母さんが受けた傷や現在の困難を保育所の保育士や保護者が支えていて、そしてその中で人の議論を聞きながら彼女はおそらく心のリハビリを経ていて、そして自分に何かできることがあればしてあげたいなと思っていらっしやったのでしょう。

市民をつくる保育所

結局大人が育つというのはそんなもので、日常生活が非常に重要なんです。なんか話を聞いたり、本を読んだりしてもなかなか育ちません。先ほども言いましたが特にいまの子育て世代は、人間の助け合いが大事ですよと

言われたって、世の中の職場の人間関係とかこれまで経てきた人生の中で、そんな甘い言葉を信用できるような経験はしていないはずです。そういう事があつたらいいだろうなとは思いますが、自分の経験で救った、救われたという事がなければ新しく足は踏み出せません。だけど幸い子育て時代というのとはとも困難が多くて破綻することが多いのです。

さいわい50代60代の世代は、村社会の知り合ったもの同士が綿密に助け合うという記憶をほのかに残している世代です。そういう意味で日本社会は大きな変革の時期で、世代もずいぶんと変わってきました。こうした中で大都会の東京などでは、お互いの顔を見知る機会をもつ町づくりは非常に困難だと思います。しかし今日のような場を、集まって出会ったもの同士がお互いの事情を知り合うような綿密な自己紹介のできるような機会の場として、そしてお互いが助け合うような町づくりの第1歩を踏み出す必要があるのではないかと思います。その点では保育所というのは、親としての成長を支える重要なところでもあるけれども、日本における新しい市民をつくる非常に大きな役割を持つところなのです。

アトム共同保育所の本



不思議なアトムの子育て

『不思議なアトムの子育て/アトム保育所は大人が育つ』 横川和夫 / 著
 太郎次郎社 2001年4月発行 230P 20cm
 ISBN: 4-8118-0660-3 価格: 2,000円

【目次】

- ・パンツ、メガネ隠し事件
- ・謝らせても事件は解決しない
- ・子どもが"自信をもつ"とは?
- ・母親は子育ての不安に揺れる
- ・アタマジラミ事件
- ・新しいタイプの母親登場
- ・イワちゃん事件 - 保育士と母親とのいき違い
- ・イワちゃん事件 - 信頼関係をどうつくるか
- ・涙と笑いの卒所式
- ・四年目、担任持ち上がり事件
- ・母親たちの"紙回し"事件
- ・市原所長代理の人となりと足どり
- ・ヘルプを求めあえる地域づくりへ
 アトム共同保育所長・山本健慈さんの理論と実践



おたがいさま!

『おたがいさま! /家出のできるまちづくり』 アトム共同保育所 / 編
 2000年10月発行 173P 26cm
 価格: 1,500円

【目次】

- ・地域で親が育ち、子どもが育つ
 ...第20回くまとり子育てと保育を考える集い
- ・ドラブリながら大人(保育士・親)が育つ
- ・出産と子育てを支える
- ・時代が求める保育所像
 ...アトム共同保育所からの発信
- ・クラス懇談会と保育士の格闘
 ...和歌山大学教育学部集中講義より

お求めは協同総研まで!

Tel 03-5963-5355

E-Mail kyodoken@jicr.org